本格化する有明臨海工業地帯づくり

日立造船が進出する有明臨海工業地帯用地の建設起工式は、二月六日現地長洲町で行なわれた。日立造船有明工場用地として埋めたてるのは百五十三万二千平方㍍。日立造船の計画では、四十七年六月から工場建設に着工、造船・陸上機械・造船の順序で工場をつくる。第一期工事として着工する造船部門設備は船体中央部をつくる専業ドック・船尾建造・ギ装ドックを建設、四十八年中ごろから一部操業を始める。そして四十九年末には二十六万トンの船の進水と工場の完工式を行なう計画である。また、陸機部門は四十九年に着工して五十年から操業を開始し、肥料・石油精装などの大型プラント、超大橋などを生産する予定。

有明臨海工業地帯づくりは、三井アルミ・不二サッシにつづく日立造船の進出によりいよいよ本格化してきたわけである。

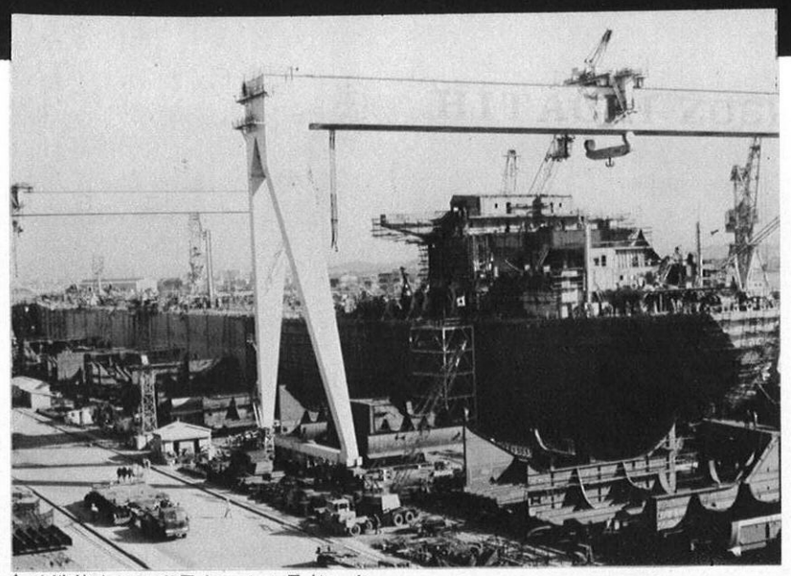
▲県民の期待をのせて海中に立った三本の水柱に、思わず歓声が上った。

▲新らしい工業地帯づくりを祝い、現地で各界代表を迎えて祝賀会が開かれた。

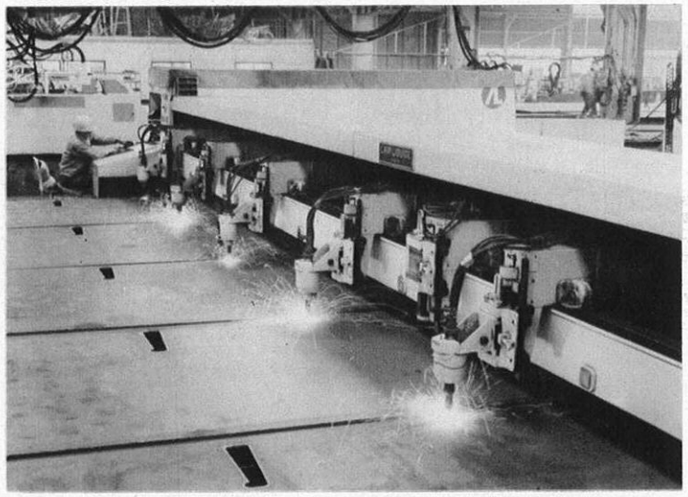
◀地元の人たちも早くから会場につめかけ、マンモスタンカーの夢を描いて起工式を祝福した。

やがてこんな造船工場が
★日立造船堺工場を訪ねる……

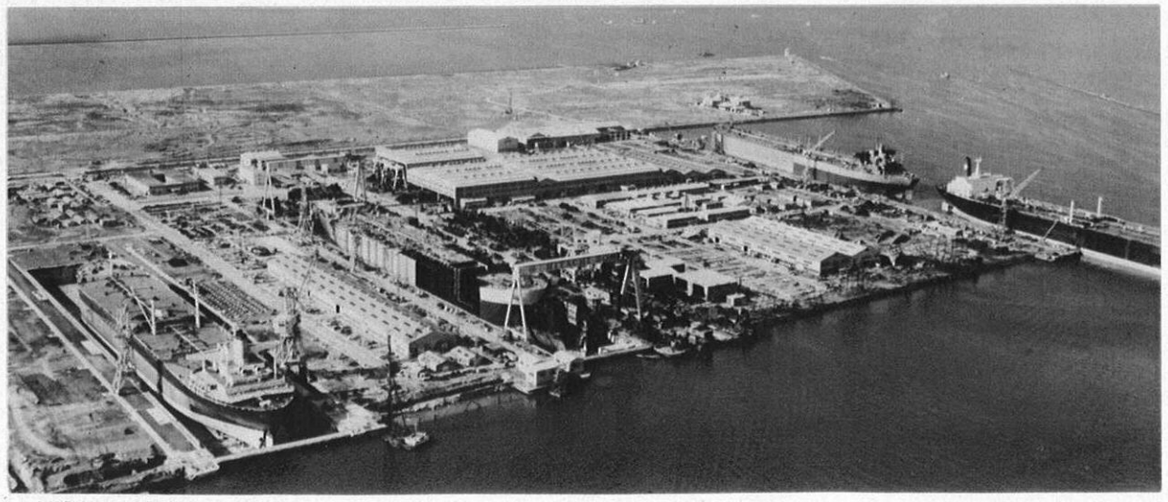
長洲町にできる日立造船有明工場とほぼ同規模といわれる、同造船堺工場(大阪)は、大阪府が造成した堺臨海工業地帯に建設され、昭和四十一年に竣工。三十万重量トンの巨船を建造するビルディングドックや二〇〇トンクレーン、最新設備をもつ岩壁、合理化された船コク工場、さらに世界最大級の四十万重量トン修繕ドックなど、すべてが超大型船を造修するために建設された大型づくめの工場である。堺工場の建設方式は、ドック内で一隻半を連続して建造できる、日本では最初のセミ・タンデム方式を採用しており、絶えず大ブロックがドックに搭載され、年間平均四～五隻の超大型船が建造されている。



▲建造能力30万重量トンの1号ドック。



▲コンピューターコントロールによる鋼板自動切断システム"HIZAC(ハイザック)"



▲堺工場の全景。